



八幡治美氏が大山町での農業経営改善の  
実践を熟つばく語った

## 『村づくりを考える』講演会

● ● 100人が真剣に ● ●

厳しい農業経営の中で今、「村おこし」運動がよくいわれるようになりまし。田園都市南園市でも各地区で農業経営の新しい取り組みが行われています。

三月十五日、地域農政推進協議会主催の講演会が社会福祉センターで開かれ、市内各地区から農業後継者ら約百人が集まりました。「村づくりを考える」と題して大分県大山町農協組合長の矢幡治美さんが講演。町長として、組合長として、農業経営改善の取り組みを約二時間にわたって話し、聴衆者も真剣に聞き入っていました。

以下講演内容は――  
大山町は、農業が主な小さな町です。町長時代、まず農家が豊かにならないければ町の発展はないと

考え、予算もそのために注ぎ込みました。そして、田に梅を植えることを始めました。

私自身、四畝の田を持ち、麦、あわなど、いろいろな作物を作っていました。暮らしては楽にならず、「種まき農業はダメだ」と強く感じたからです。

また、大山町のような場合は、小規模生産方式でなければならぬと感じ、いろいろな改革もしてきました。米作りをやめ、牛を飼うことをやめ、奥さんたちの労働を減らすために、手間のかかる農作物はやめる。農機具はいらぬ。そして年中仕事があり、労働ビークがない経営を目指してきました。

昔、農家の人たちは遊ぶことが罪悪のように感じていました。しかしそれでは、嫁の来てもなければ、後継者も育ちません。

まず、農家生活を楽しいものにしていかなければなりません。農機具も持っていない貧しい村だからこそ、みんなが協力し、楽しさだけはどこにも負けない地域づくりを進めてきました。

一月から三月は生活を楽しむ月として、農協が海外旅行やスキーなどを企画しています。これらの資金は農協からの借金です。そのため、借金を返すための収入もきちんと上げなければなりません。現在、私たちの町では一戸当た

り平均五百万円の収入を目指し、そして次の三つを目標に事業を進めています。一つは安定収入のある農家。二つめが月給がとれる農家。つまり毎月毎月、現金収入があるよう作物を作っていくこと。そして最後が週休三日の農家を目指していくことです。これは週三

## 芸西村婦人会が研修に

婦人会活動の先進地視察にと、芸西村婦人会（手島春美会長、会員四百九十人）が三月十五日、市連合婦人会を訪問。

一行は手島会長と各役員、村教委の担当者ら十九人。本市を訪れるのは初めてということで、まず園府地区の史跡を見学。紀貫之邸跡、比江廃寺塔跡、乾家の大墓を回りました。

その後、市社会福祉センターに

日休むのではなく、一日四時間の農業を7日間すれば週四日の計算になります。

大山町で私がやってきたことは理想という種まきをやってきたと思っています。この種を村の人たちがどう育ててくれるか、今後の問題です。

集まり、市連合婦人会（西森律会長）との交流会。市連からは各区の会長ら十一人が出席し、それぞれの活動を詳しく報告、問題点など、約二時間にわたって積極的な意見交換が行われました。

最後に、手島会長が「皆さんから貴重な意見をお聞きし、ありがとうございます。今日の話を通じて、十年度の活動にぜひ生かしていきたい」と、抱負を語っていました。



比江廃寺塔跡を見学する芸西村婦人会の一行